

## 前発話期から発話期における否定表現の展開

秦野悦子\*

### 問 題

前発話期から発話期にかけて、子どもがどのように否定に関する認識を持ち、どのような表現形態で展開して行くか、という問題を、語用論的観点から検討する。

論理的否定は、文の意味、即ち、文法的解釈に基づき、それに相当する真理値 (truth-value) を逆にするだけであるが、語用論的否定は、発話が同時に行なわれるものである。また、人間が外界に働きかける際用いる表現形態に、2つの方向性があるとするならば、ひとつは「微笑」に代表されるような正 (positive) への方向付けで、機能としては、要求・受容・是認・新情報の伝達等の機能を含み、もうひとつは、「泣き」に代表される負 (negative) への方向付けで、拒否・否認・非存在・禁止等の広い概念領域を含む。本研究では、「機能的に未熟な段階から否定の発生メカニズムを探ること」に視点を置いているので、負に方向付けられた表現形態を総称して語用論的否定とする。

このような領域を含む語用論的否定は、発生の極めて早期から人間に備った機能と見なされる。Spitz (1968) は、発話発生前の子どもの非発話的現象の中から、後の発話と機能的に深く関連する身振りを抽出し、そこに、慣用的に使われる首の横振りや、他の排斥的身振りに否定の存在を認めている。彼は観察から、首の横振りの運動パターンそのものは、出生直後から乳首を求める探索行動型として利用され、探索を行わないで即座に乳首に口が到達することが可能になる時期に、それとは異なる機能として利用されていることを見出している。即ち、乳児が飽食し口に含む乳頭を排除しようとする時、頭を左右に振り目的を達する。この反応が拒否 "No" を意味するようになるのは、吸啜一吸乳経験後で、このような意味的挙動は、生理的・形態学的・自然発生的基礎を持ち、世界中最も広く使われていると示唆した。

一方、池上 (1978) は、「首の横振り=否定」という図式は、日本や欧印系の社会の人々の場合に合致し、ブルガリアやトルコ等の社会では逆であるという事実から、この身振りが社会慣習の側面に深く関わる現象であることを指摘した。

そこで、首の横振り行動がどのような過程を経て、否定の慣用的身振りとして定着して行くのか、その発生メカニズムの解明が第1の問題である。

さて、日常生活場面で相互交渉の際に頻繁に用いられる否定は、伝達機能習得における中心的問題のひとつである。従来、否定習得への関心は1語発話出現以降の発話形式に向けられ、意味的 (Bloom, 1970; McNeil & McNeil, 1973; Ito, 1981; Yamamoto, 1981)、統語的 (Bellugi & Klima, 1968; Bellugi, 1971; Slobin, 1973; Brown, 1973; Wode, 1977; 綿巻, 1977) 発達に関する分析研究が行われてきた。また、ここ数年、語用論的側面から否定を分析していく研究も見られ (Steffensen, 1978; Akiyama, 1979; Keller-Cohen, Chalmer & Remler, 1979; Volterra & Antinucci, 1979; Pea, 1980, 1982)、各々興味深い知見が得られてはいるが、問題の取り上げ方は散発的であり、相互に関連のある否定の分析は十分でない。特に前発話期から発話期にかけて、非発話と発話の構造的連続性を扱った研究 (秦野, 1981; 山田, 1982) は極めて乏しい。

そこで第2の問題として、乳児期から、否定がどのような行動で表現され、それには、どんな要因が関与しているか、との発達の視点での解明が必要で、その為には、否定を単に論理的なものに止らず、広く日常生活の人間関係の中で展開される語用論的否定を捉える事、さらに、発話発生以前の表現形態を、個体発生における連続的過程として捉える視点が重視されよう。

ところで、初期伝達行為は、行為者の情緒状態と密接に関連して現われる、対人的・相互作用的・社会的機能であり、相手に働きかけて目的を達するものである。が、やがて、子どもは外界認知に基づく知識、思考なりを反映し、新しい観念形成を導くと言われる (Leopold,

\* 道灌山学園保育専門学校

1949; Jakobson, 1972; Werner & Kaplan, 1974; Austin, 1978; Bates, 1979; Ingram, 1981)。そこで第3の問題として、否定表現の発達経過がこのように初期伝達行為の発達過程で生じる変化プロセスに従うのかどうかの検討も行う。

否定の意味機能を表わす発話形式の発生順序に関して、Bloom (非存在→拒否→否認), McNeil & McNeil (非存在→否認→拒否), Ito (拒否・禁止→消失→非存在・否認) 等は各々の見解を提出している。否定の発話形式発生順序について解釈する時、ある発話が比較的遅く出現する理由は、子どもの認知能力によって抽出化しにくい特性即ち、認知的複雑性 (Cognitive Complexity; Slobin, 1973) によるのか、それを表現する発話形式が相対的に複雑なこと即ち、形式的複雑性 (Formal Complexity; Slobin, 1973) によるのかは、発話形式からは推論できない。

ある発話形式を正しく使用する為には、その形式が表現する概念の習得が必要である。その点、初期発話は認知発達に依存、あるいは随伴することは認められても、子どもの否定意味機能習得順序が、そのままその発話形式が用いられる順序に反映されるとは限らない。第4の問題としては、否定意味機能と発話形式との対応を明らかにする中で、非発話を含めた否定意味機能習得の順序性と、否定発話形式習得の順序性の問題を検討することになる。

最後の問題は、子どもの初期発話に出現する否定構造の一般的方略を分析することにより、子どもがどのように発話形式を構成し始め、それがどのような操作原則に基づくものであるかを検討し、欧米の研究 (Bellugi & Klima, 1968) や日本の研究 (綿巻, 1977) 結果との照合により、子どもの操作原則の普遍性、個別言語依存性を明らかにしたい。

以上5つの問題解明の一方法として、個体発生の連続的過程の中で、ひとりの子どもが、否定行為を、その生活の中でどのように表現し、展開していったかという、同一対象児の縦継的資料に基づいて検討する。

## 方 法

語用論的否定は、それが使用された状況や、場面から、行動レベルで評定し易いので、意味機能の連続性や、行動形態の変化を捉えるのに適している。更に、子どもの非発話的行動を解釈する時、通常、その子どもと親しく接している者は、子どものちょっとした仕ぐさ、特定の表情、身体の動き、視線、発声、音調、語気の強さの手

掛りや、その行為が行われた文脈、あるいは、過去の生活経験等の諸情報を最大限利用して、子どもの意図を容易に理解することができる。

本研究の日誌観察資料は、子どもの否定行動全ての記録がされてはいないので、量的測定値は提供し得ない。しかし、子どもの日常生活場面の自発的な語用論的否定行動に注目、記録してあるので、最初に生じた事例、まれに生ずる行動、ある時期に頻繁に出現する行為とその質的变化等は、記録される可能性が高く、その意味で、子どもの行為に内在する基底構造を把握できる。どんな時期に、どんな行動形態で否定を表現し、さらに、ある表現形態が、他の伝達形態にどんな影響を与えていくかは、実験や、組織的観察で誘発させるのは困難であり、むしろ、日誌観察資料で有効に捉えられる側面である。

分析に用いた資料は、筆者の次女の出生時から、生後2歳0か月30日 (以下2:0:30)迄に観察された日誌記録である。A児は1981年6月12日生れの女兒である。出生時から現在に至る家族は、父、母、姉 (1:11:2年長) である。胎生期、周生期とも正常で満期 (38週) 出産。出生時体重3,025g、首すわり0:3、始歩0:10:23、始語0:10、2語文 (語連鎖) 1:8:17であった。生後、0:2:20より、無認可乳児預りで保育を受け、生後0:9:20より、姉の通園している公立保育園に入園し、現在に至っている。

母親 (筆者) との接触は、主に朝と、夕方から夜、休日に、父親とは、朝の短時間と休日に限られ、記録もその範囲内で行われた。一緒にいる時間の母子相互の遊びは積極的に取り組んだ。乳児期より、人見知りは強く、担任の保育以外の者には警戒心が強く、母親との分離不安も強い。近隣でも姉の後について、自分より年齢の高い子どもとの接触機会が多い。

日誌記録は、伝達行動に関する行為と、その文脈を、気づいた時にその場で記述 (室内の壁の各所に貼った記録用紙に随時記入) したものを、後で観察ノートに転記した。このような縦断的日誌観察記録から抜き出された否定表現すべてを基本的資料とした結果、396エピソードが分析の対象となった。

## 結果と考察

### (1) 首の横振りが否定を表わす典型的身振りに定着する過程

TABLE 1 に主要な観察例を列挙した。A児の場合、0:3頃、首を横に動かして顔をそむけ、不要な対象を回避する、運動機能のひとつであった。その証拠に、対象を回避すれば、首はそれ以上動くことは無く、また左

TABLE 1 首の横振りが否定を表わす典型的身振りに定着する過程

月 齢	主 要 観 察 例	首の横振りで表わされる意味
0 : 3 ~	授乳に満足すると、乳首を「唇で振り払う」「顔を横にそむける」 母が無表情でじっとA児の顔を見ると顔を横にそむける	不要な対象を回避する為の運動機能
0 : 5 末	母がA児をおぶい、鏡の前に立つ。母の肩越しにA児の顔が鏡に映るような姿勢を母がとる。すぐに180度向きを変えて、母の(反対の)肩越しにA児の顔が鏡に映るような姿勢を交互にくり返すと、大はしゃぎをする。	快状況で頻出
0 : 6 : 5	母がA児をおぶい、鏡の前に立つだけで首を左右に振り始める。	①特定場面かつ特定姿勢でルーティン化された遊びとしての運動パターン
0 : 6 : 13	鏡場面だけでなく、母や姉が首を振ると呼応するように同じ動作をする。	②他者の振舞いに注目し、共鳴する行動
0 : 6 : 18	上半身を前後に揺する喜びの表現に、首の横振りが伴うようになる。	③嬉しさを表現する際の行動レパトリーのひとつ
0 : 7 : 13	母に抱かれている時、久しぶりに会った大人が、「いらっしゃい」と、だっこを誘い、手をさしのべると、A児は激しく首を左右に振り、顔を母の胸に埋める。	原否定の身振り(抵抗的身振りの一形式として「首の横振り=否定」の芽生えとなる行為)
0 : 7 : 15	A児に向けられた発話でなくても「イヤイヤね」という発話を聞くと、急に首を左右に振り始める。 機嫌よくひとり遊びをしている時、首を横に振っていることがよくある。	「イヤイヤ」という特定音声为首の横振り と 結びつく 延滞模倣
0 : 8 : 20	ベビーシッターの「イヤイヤしてごらん」に即応して、首を横に振る。	言語指示の理解
0 : 11 : 15	食後、食堂椅子から降ろす為に、母が「だっこしよう」と両手を差しのべると、首を横に振り、両手でテーブルをバンバンたたき、むずかり声を出す。	不快情動と結びついた拒否の慣用的身振り 不快情動と離れた否認の象徴的慣用身振り
1 : 0 : 5	各自の持物を次々と、その持主に持っていく。父の上着を持って、母の方に近付いて来た時、母が「はい、どうもありがとう」と言って受け取ろうとすると、首を横に振り、母の前を通過して父に渡しに行く。	
1 : 1 1 : 5	笑顔で首を横に振りながら } 母の方へ近付き、母が話しかけると「キャー」と大喜びし、急いで笑顔で「イヤ(ダァ)」と言いながら } カーテンの後に隠れる。	(勧誘)
1 : 7 : 9	「Aちゃんおしっこは？」と誘うと顔の前で右手を左右に振りながら「イイノ」と拒否する。	(首の横振りの形態拡大使用)

右の連続的動きにもならなかった。

0 : 6頃、首の横振りは、①母に背負われて鏡に対面するという特定場面、かつ特定姿勢がとられた状況下での、刺激と応答のルーティン化された遊びにおける運動パターンであり、また②身近にいる他者の振舞いをみて触発された行動、つまり「他者の振舞いに注目し、共鳴\*」する行動のひとつであり、さらに、③嬉しさを表現する際の行動レパトリーにも組み入れられた。この時期の用法に共通している点は、連続した首の横振り行為を、遊びの要素が強く、对人的関わりのある快状況で盛んに用い、楽しんでいる事である。

\* 他者の挙動や行為を我が身に感じる「共鳴と注目」は、一体感(unipathy)、情動転移(Zustandsübertragung)あるいは反響動作(echocinesie)とも言われる。

0 : 7以降、首の横振りは、①他者からの働きかけを回避、拒否する原否定の身振り(抵抗的身振りとして「首の横振り=否定」の芽生え、あるいは前兆的行為)が観察された。②本児に向けられたのではない第3者同士の会話の1部(「イヤイヤね」という特定の音声)を抽出し、自らの知識(イヤイヤ=首の横振り)と照合し、特定の動作(首の横振り)を引き起こした。③延滞模倣的にひとり遊びの時に、直接、前後の文脈と関わりが無いと思われる状況で、首の横振りが繰り返された。

0 : 8「イヤイヤしてごらん」の他者の促しに即応し、同じやりとりを何度も楽しむ行為が頻繁にみられた。

0 : 11頃から、嫌とか不快とかを、場面や状況に応じていろいろな行動で使い分け、伝達意図が明確化されていく中で、首の横振りも拒否の象徴的身振りとして、慣用的に使われるようになったが、まだ首の横振りは、他の抵抗的身振りとは切り離されない。しかし、「Yes-No」

質問の負方向への応答として、強い嫌悪の情動、あるいは、手や腕による抵抗的身振りと離れて、首の横振りのみで否定意図を表わしたのは1：0過ぎで、この時点で「首の横振り=否定」が、意味するもの (signifiant) と意味されるもの (signifié) に明確に分化した象徴的身振りとして定着したと考えられる。また「○○が欲しいの？」という“Yes-No”質問に対しても、手で払い落とす等の直接的拒否行動ではなく、肯定の頷きと、否定の首の横振りを使い分けて、伝達行動を行うことも可能となつて、記号的価値の高い身振りとなっている。

「首の横振り=否定」の定着後、2つの変化が観察された。第1は表現形態の変化。A児は1：7に顔の前で右手を左右に振ることで否認を表わした。これは「首の横振り=否定」要素の内、左右に動かす動作のみが否定表現形態として残り、動かし易い手が使われたものである。この右手を左右に振る用法は、その後、ごっこ遊びで何かの役割を演じていて、「イーエ、イーエ」と大袈裟に否定意図を表わす場面で用いられる。第2は機能の変化。笑顔で首の横振りをしながら (1：1～)、あるいは笑顔で「イヤ」「ヤダア」等言いながら (1：5～) 母親の方へ近寄り、母親が話しかけると「キャーア」と大喜びし、あわててカーテンの陰に隠れる事で、母親を追いかけっこに誘う「勧誘」(invitation) の機能を表現した。

以上、首の横振りの運動パターンは初期から存在していたが、否定の慣用的身振りとしての首の横振りは、他者との相互交渉の中で、高い実用的価値を荷いながら「否定」を表わす応答的身振りとして、生後1年頃までに習得されていく。この慣用的身振りが習得されると間もなく、不快情動と離れた (抵抗的身振りを伴わずに) 場面で否認を表わす象徴的身振りとして用いられる。

## (2) 否定に用いられる行動パターンの変遷

発達の各期に、否定表現に用いられる主な行動パターン、および、その具体的行動出現時期を TABLE 2 に示す。

出生直後から0：4頃までは「泣き」「むずかり声」と、それに付随する回避的身振りが出現した。特に初期は、授乳時に乳首の放乳と、子どもの摂取リズムが合致しなかったり、乳首が飲み易い角度で口の中に入らない場合、大泣きがみられた。また、舌で押し出したり、口を閉じたりで乳首を取り込まず、不快表情や体を使っての回避が観察された。0：3頃から満腹すると、乳首を唇で振り払う、顔を横に向ける、全身でつつばる、そっくり返るなど、より積極的な回避行動が出現した。

0：4から0：9頃にかけて、新たな行動形態として、手、腕の動作が盛んに用いられた。即ち、手で防卸、振

り払う、放り投げる、振る、しがみつく、脇へ押しつける、叩く、払いのける、ひっ込める、ひっ張る、等多彩。0：5：2 この頃メンコに熱中し、しばしばそれを両手に持って4隅を順になめまわしていた。A児が手に持っているメンコを取りあげようとする、手で防卸したり、ぎゅっと強く握り込んだりし、他の物を渡そうとすると、それを振り払ったり、放り投げたり、頻繁に手が使われた (探索的活動においても、片手による到達一把握行動が行われる時期と一致している)。

一方、初期には要求実現に適切な手段を使わず「ぐずり泣き」が観察されたが、自力で移動可能になり、手指の動きが微細になり、事物操作レベルが高度になることで、以前は出来なかった場面解決、処理が可能になり、要求実現が達成されることも多くなる。その結果として、日常生活上は、外界あるいは他者に対して「○○したいけれどできないので泣く(怒る)」というタイプの要求実現拒否がこの時期に急速に消失していく。

例えば母親がA児に排泄を促し、おまるに腰掛けさせる状況で、A児がそれをどのように拒否するか、月齢を追って記述すると、

0：6：2 (以前のように大人しく座ってはず)、独特の、甲高い抑揚のある「アウウーン」という発声と共に、後ろに反り返り、腰掛け座位姿勢をとろうとしない。

0：7：25 おまるの把手に両手をあて、両腕をびんと伸ばして上体を浮かし、立ち上ろうと四肢をつっぱるが、成功しないので「アアン、アアン」と大声で怒る。

0：8：25 傍らにいる母親の肩に手をかけて、自らの右足を軸にして左足をあげ、おまるを跨いで降りる。

0：10：24 排泄を促すと、必ず逃げて窓際のカーテンの後ろに隠れる。あるいは、自力でおまるから降り、おまるの蓋を閉めた後、把手を各々の手で握り、部屋の隅まで押しやり、片付ける。

0：10頃から1：1頃迄は、次の3つの変化が認められた。第1は、首の横振りを慣用的否定表現として使い始め、否定を表わす象徴的身振りとして定着していった。第2は、0：8-0：9頃に生じた提示 (showing)、授与 (giving)、指さし行動 (pointing) 等の対象指示行動が、単に相互交渉過程における交換的やりとりを楽しむ目的だけでなく、1：0過ぎには否定表現の補助的手段として使用され始めた。自分の欲しくない物、不要な物を示されたり、渡されたりした時、逆に相手につき返したり、差し出したり、食べ物の場合は相手の口の中へ入れようとする事で、「嫌だ・要らない」を意図する単純な否定から、「要らないからおかあさんにあげる」を意図する発展した伝達状況へと導く。第3は、否定を意

TABLE 2 否定に用いられた行動パターンの出現時期

月齢	全体的 パタン	具 体 的 行 動			
		発声および発語	顔とその表情	手あるいは腕の動き	手や腕以外の動き
0:1	泣き・むずか り中心・むず か動とした た無り	泣き・むずかり声	口を閉じて開けない 顔歪める(泣き・怒り・ 視線そらす・眉しかめる) 舌で押し出す		上半身よじる
0:2					
0:3					
0:4					
0:5	手・腕の積 極的利用	抑揚強度	唇でふり払う 顔をそむける	物・身体の一部を手で防御 振り払う、放り投げる、摺む	母親にしがみつく  対象から遠ざかる、身をのり出す
0:6					
0:7					
0:8					
0:9					
0:10					
0:11	音的 使用の相 補的関係 と	首の横振りの慣 用	首の横振り 慣用使用	握りしめる、指示、手渡す	逃げる、うつぶして泣く、 相手と一定の距離を確保、 かんで踏んぱり動こうとしない、
1:0					
1:1	否定的原言語	首の横振り 慣用使用	噛みつく	奪う、指さす、背中に隠す	相手を移動させる
1:2					
1:3	否定語と身振りによる複合的否定	否定語単独使用		腕の中へ抱え込む	
1:4					
1:5					
1:6					
1:7					
1:8					
1:9					
1:10	否定発語	否定の語連鎖		顔前で片手を左右に振る	
1:11					
2:0					

図する特定の音声（上昇調の、甲高い特定の抑揚を持った「アウウン」という音声）が、拒否表現に伴って出現した）、および、否定的原言語\*(1:1に「パッパッ」「アッ」が使われ始めた)が発現した。

上述のような社会的に慣用化された身振りや、日常生活の類似的場面で繰り返して使われる、個人的に固定化し、

儀式化し、否定を表わす様式となった身振りや音声を、目的意図的な表現形態として利用するうちに、次第に否定意味と、表現形態が明確に対応してくると言えよう。

この時期の発声は、相手の注意を喚起したり、情動の強さを表わし、身振りは否定の意図内容を表わす。その際、発声と身振りは互いに相補的役割を果たし、効果的な統合された伝達行動が行われる。

1:3に否定語(「イヤ、アップ、ナイ」)が使用され始めてから\*\*、1:9に否定の語連鎖出現迄は、否定語単独使用期である。この時の子どもの否定表現形態には、TABLE 3に示すように、発語と身振りの興味深い関係が見出された。子どもの語連鎖表現が不十分な時、否定語は必ずしも適切に用いられてはいない。否定伝達行動

\* 喃語と言語の中間形態に位置し、語彙一文法(lexico-grammar)を含まない点、言語としての未熟さがある。が、内容(意味)と表現(音声)の一対一対応がある点で、初期過程において、原初的機能を持つものを「原言語」とする。Werner-Kaplan(1963)はvocal, Halliday(1975)は proto-language と命名している。

\*\* A児の1:3の総語彙は約20語、1:9の総語彙は約90語であった。

TABLE 3 否定語単独使用期の否定表現における発話と身振りの関係

月齢	表現形態	具 体 例
1:1	否 定 的 原 言 語	無理に服を脱がせようとする「アッ」といって服を両手で押え拒否。(1:1:2) 積み木がうまく積めずかんしゃくを起こし、「パッパッ」と言って積み木をテーブルから払い落とす(1:1:10)
	言語要求then否定的身振り	「…ンブ…ンブ」とおぶいひもを母に渡してから、大急ぎで逃げる(1:1:28)
1:3	否 定 語 単 独 使 用	ままごとで母が皿によそって渡すと、気に入らず「イヤ」と言って自分でよそいなおす(1:3:21)
	言語 and 首の横振り	「ねんねする?」と聞くと「ネンネ」と言いながら首を横に振る(寝るのは嫌だとの意図表示)(1:3:22)
1:6	身振り and 言語要求	パンを一切れ渡すと、母の手にさし戻しながら「ハンブン」(半分にして欲しい)(1:6:11)
1:7	否定語 then 言語要求	食事終了時に「エプロンをH(姉)に取ってもらいなさい」と言われて、「イヤ、タータン」(嫌だ、おかあさんがやって、の意図表示)(1:7:3)
	言語要素 and 否定辞	TVとA児の間に母が立ちほだかり「見える?」と聞かれ「ミエナイ」(1:7:24)
	言 語 訂 正	アップリケのロバをA児が指さすので、母が「これはロバさんヒンヒン」と言うと「ワンワン、ワンワン」と強い口調で訂正(1:7:10)
1:8	身振り and 言語理由	母がTVの子ども体操番組を見て一緒に体を動かそうとすると、母の体を押さえ「ジュンパン、ジュンパン」と言いつつ制止する(1:8:5)
1:9	否 定 の 2 語 文	絵本を見ながら「ニューどこ?」(象の鼻がニューとのびている絵)と聞かれると「ニューナイネエ、ニューナイネエ」と頁をめくりながら探す(1:9:2)

全般をみると、非発話形態(首の横振りや、他の否定的身振り)で否定を伝え、発話形態で新情報(自己の要求・相手の発話訂正・説明)を伝え、双方を結合して複合的否定(Complex-negation)を行う事が観察された点は注目される。

上述の否定表現パターンの変化は、単に身振りが言語に置き換わるわけではなく、後に獲得された行動が、以前から使用されていた形態に加わる事で、より一層複雑な観念を表現したり、情動の起伏を表現する。また、ある時期にはひとつの行動パターンのみが出現するのではなく、前段階の行動パターンも共存している。こうした過程を経て、各々の文脈や場面に最も適した行動パターンを選択しつつ、新しく習得した行動形態が優位となり、伝達効率が高められていくと考えられる。事実、発話表現が多様化した2歳以降でも、子どもの要求や感情と密接に関係した拒否表明には、ことばでなく、激しい身振りや、抑揚型の音声など、その時点より以前に習得された初歩的な表現形態が用いられる。

### (3)否定に関する認識の発達と否定意味機能の習得

観察期間中、A児にみられた否定意味機能は4種に大別された。その操作的定義と、それが出現する文脈的特徴はTABLE 4に、否定に関する認識の発達と否定意味機能習得の順序性はTABLE 5に示した。

最初期は、原初的排除拒否と、欲求不満拒否が出現す

る。即ち子どもへ向けられた他者の行為や発話、直面せざるを得ない状況そのものへの回避(avoid)、抵抗(registance)で、緊張低減・不快軽減の為に用いられる。

子どもの泣き叫びの程度や、全身の緊張のそり返りは、情動の強さの表現として、大人の注意を引く効果はあるが、それは単に障害物の回避に止まり、何に、誰れに対して向けられたかの内部からの方向性が不明確、非組織的で漠然とした無方向活動である。

0:2:10 抱っこが好きになり、夕方は抱いて歩きまわらないと機嫌が悪く大声で泣く。

0:2:18 母親の姿が視界から遠ざかると甲高い泣き声でむずかり、母親が戻って来ると、「アアア～」と柔らかい喃語を出す。母親が去るとまたむずかる。

0:4:20 ガラガラをあお向けの状態で、振ったり、先端の球をなめまわし、偶然自分の顔にあて、むずかり泣き、何度も手で空を切って、イライラしたような声を出す。

次の段階は、障害物の単なる回避・抵抗でなく、行為の方向性が明確な目的排除拒否への変化にある。また、0:6以前の専ら障害物排除の目的は、0:7前後に自己にとって直接障害物となるものに対してだけでなく、むしろその障害物を取り除くことができる他者へと、目的実現の効率の高い方向を選ぶように変わる。一方では、

TABLE 4 否定意味機能の操作的定義と否定が出現する文脈的特徴

否定意味機能		操作的定義	文脈的特徴
拒	排除拒否	直接自己へ向けられた、他者の行為や発話への、負方向の応答。「私は〇〇をしたくない」の意味	他者からの援助、介助、命令、要求、願望、また「〇〇が欲しいの?」と言うような欲求の“Yes, No”質問などが先行する。
否	要求実現の為の拒否	自分のしようと思っている行動ができない事を表明し、現状に何らかの変化を要求する負方向の表現。「私は〇〇をしたいができない」の意味	自己の何らかの目的達成あるいは自己の要求実現の為に、大人のスキルや助力を求める。
否	認	問題となっている先行発話、事柄、事物、状態を事実である(自分の意見である)とは認めない(不同意)こと。「私は〇〇とは思わない」の意味	相手の意見に不同意、不適切な表現の訂正、自己の認識と事実関係のギャップ(満たされない期待や前提)が先行条件となる。
非	存在 (消失)	予期又は期待した事態に反する事実についての認識表明。「存在しない」を意味する。直前まで眼前にある物・人・行為等の感覚刺激が、もはや知覚できない認識の表明	「存在するはずだ」という前提が先行条件となる 「過去に存在していた」という前提が先行条件となる
禁	止	(直接自己に向けられたのでは無い) 他者の行為や活動を、拘束したり統制したりする行為。「〇〇してはいけない」の意味	自己と外界、あるいは自己と他者の相互関係の理解が先行条件となる。

TABLE 5 否定に関する認識の発達とそれに伴い習得される否定意味機能

月齢	新たに習得される意味	否定に関する認識
0:1	原初的排除拒否	直面する状況の緊張低減、不快軽減
0:2		
0:3	欲求不満拒否	無方向で非組織的な回避、抵抗的行為
0:4		
0:5	目的排除拒否	相手の反応を期待したり予想したりしながら、尚自立の行動修正を行う、方向性の明確な行為。
0:6		
0:7	要求実現拒否	否定対話構造の成立(要求-拒否、指示-撤回のやりとりパターンを積極的に維持する)
0:8		
0:9		
0:10		
0:11	否認	不快情動と結び付かない意図表明
0:0	禁止	意味するものと意味されるものの分化
1:1		
1:2	非存在	自己の意図、期待、予想(「〇〇のはず」と現実との相違に焦点が当てられる。
1:3		

他者から向けられた行為でなく、自ら開始した行為について、目的達成・要求の実現と密接に結びついた文脈で生ずる「〇〇したいけれどできない」という要求実現達成の為の拒否が出現した。

0:6:23 手を伸ばして物を取れない時「アーン」と怒ったような大声を出し母の顔を訴え顔に見る。

0:10頃、否定表現は、一方的な自己表現活動でなく、相手の反応を期待したり、予想したりしながら、自己の行動修正を行う点が注目される。散歩の途中、母親に抱

きあげてもらいたい状況の時、以前は、少し離れた前方から呼ぶと、大急ぎで近寄ってきた。が、0:11:19では、呼ばれると、①数歩前進して立ち止まり、母親の様子を伺いつつ泣く、②母親が来る迄、その場から動かず、むずかり顔で立ちつくす、等がある。

この時期は生活全般に不快情動に支配された拒否が圧倒的に多く観察されるが、次のような場面での相互作用持続の手段にも利用されている。

0:8:16 父親が「抱っこしよう」と言いながら両手

を出す、ふざけ笑いをして、父親に手を出し、身をのり出した瞬間、さっと手を引込めて、クルリと反対側を向き、側らにいる母親の胸へ顔を埋めたあと、キャッキョッと笑って父親の顔を見る。

このような子どもの行為は、相手を、日常生活の中の「要求—拒否」「提示—撤回」という十分に確立されたやりとりパターン (well established format) へと導入し、その維持の為に相手の注意を引き付け、自らその交換を主導する、積極的な行為である。これは、既に子ども自身、否定の対話構造 (dialogue structure of negation), あるいは、会話行動に於ける役割 (speech role) について何らかの認識が習得されていることを示唆する。

最後の段階は、不快情動と直接に結びつかない場面、自分なりの外界認知に基づく、判断叙述形式の表明である (TABLE 3, 1 : 7 言語訂正参照)。その第1は、相手の意見や、話題の事柄、状態を、事実 (自分の意見である) とは認めない態度表明の、否認が出現する。

否定の判断叙述形式の第2は、他者の行為や活動が、自己に直接向けられていないのに、他者の行為を拘束統制して、「○○してはいけない」の意図表明、禁止の出現である。

1 : 0 : 20 母親が他者と会話中、近寄って来て、母親の膝に乗り、母親の口を手で塞ぎ、自分に注目させようとする。また、保育園では保母を独占したが、他児が抱かれていると怒り、その子を叩いたり、噛んだりする。

この段階では、自己の経験の枠内で、種々の事物や性質、関係を配列、整理、統合し、「○○のはずである」という見通しを持ち、他者との関係で自己を捉えたり、ものを認識していく。同時に自己主張も盛んになり、他者の介入で要求実現が阻止された場合に示す拒否は、徹底的である。

1 : 0 : 30 父親と姉と3人で入浴中、姉の手にする小バケツが欲しくて、バケツの柄をひっぱろうとする。姉に「ダメ」と、A児の手の届かぬ位置に持ち上げられると、「ワッ」と泣き出す。その烈しさに姉が圧倒され、「ハイ」とA児にバケツを渡そうとすると首を強く横に振り、それを振いのける。バケツが欲しかったのだが、拒否されたのが悔しく、自己の要求を受け入れられなかった事に対し拒否を表明している。

第3は、「過去に存在していた」という前提に基づき、直前まで眼前にある物、人、行為等がもはや知覚できない事を表明する、非存在 (消失) である。また、「存在するはず」という前提で予期あるいは予期した事態に反する事実表明の、非存在である。

1 : 2 : 5 Uさん宅でキャンディ罐を見つけ取りに行き、両手でその罐を持ち「マンマ、マンマ」と開けて欲しそうにU小母さんにその罐を渡す。U小母さんの「これ開けるの?」の問いに頷き「マンマ、マンマ」と言う。罐が開いて、中に何も入っていないのを見た瞬間「ワッ」と泣き出す (A児はその時迄に、そのキャンディ罐と同一のものを見た事は無い筈であるが、①キャンディやクッキーの罐に関して、大きさ、型、模様、柄、色合い等の何らかの概念や規範を持ち、②そのような罐の中にはマンマが入っているはずとの自分なりの情報を引き出した)。

1 : 3 : 5 おぶって保育園に来たので靴を持ってこなかった。降園時、A児はいつもの手順で降園準備をし、靴棚に靴が見つからないと探し回る。「靴を履いて来なかったのだから」と母親が説明しても納得せず、探す。

非存在は明らかに「○○のはず、のつもり」の否定で、自己の明確な基準や前提の否定である。非存在に最も多く用いられる前提は、典型的文脈 (prototype-context) 基準に依存するもので、「ある対象が、然るべき場所に存在する」という物の永続性の認識である。

否定意味機能習得では、初期に、主体の要求や感情と密接に結びついた行為として、実践的・対人的動機により、原初的排除拒否と欲求不満拒否が出現し、要求実現拒否を経て、次に否定意味機能の拡大・分化が顕著となり、外界認知に基づく判断、という認知的動機が支配する、否認・禁止・非存在が習得されていった。本例では、否定の発話形式出現以前にこれらの意味機能を習得した。

#### (4) 否定発話形式の習得

FIG.1 に否定意味機能と、それに対応する発話形式の習得過程を整理し、既に非発話形態で表わされていたものに、どんな単語が与えられていくのかを分析する。

①排除拒否 自己の要求や主張と密接に関連し、使用頻度も高く、多種の発話形式が用いられた。否定意味機能が出揃う (1 : 2) と間もなく、A児は否定的原言語を用いた。①他者から「ちょうだい」と手を差し出された時、相手の手を払いのけ、②食卓で食べたくないものの皿を押しつけ、③誘いかけを拒否する時に、首を強く左右に振り、「アッ」「パッパッ」という特定の音声を用いる。このような否定的原言語は、否定語出現直前の極めて短い期間での過渡的なものであり、1 : 3 に否定語「イヤ」が出現すると漸次消失した。排除拒否で最も良く使われるのは「イヤ」(イヤヨ、イヤダ、イヤア) である。この他1 : 3から1 : 4に「アッ」が用いられた。衣服の着脱を嫌がる際に、母親が無理に脱がせようとする「アッ」と言っ自分の衣服を押える。「ア

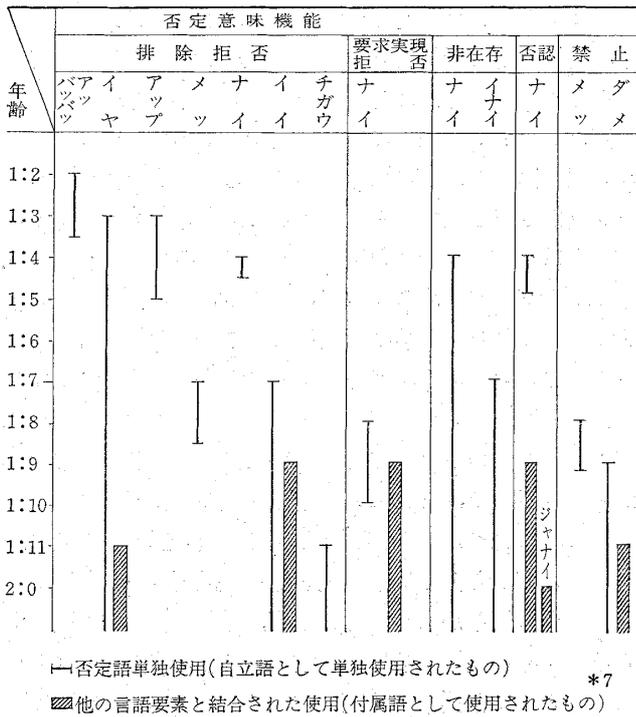


FIG. 1 否定意味機能に対応する発話形式の習得

「アップ」は、保育園の担当母が「いけません」の意で、子ども達への禁止語に用いたもので\*\*、家庭では用いられなかった。A児は他者からの働きかけを阻止する為の強い排除拒否に「アップ」を用い、禁止には用いなかった。また「メッ」も1:7に頻繁に用いられた。

1:7:24 母親が菓子皿の菓子を、A児に渡し「おとうさんにもひとつあげてね」と言うと、「メツメツ」と言って首を横に振る。また相手に「ちょうだい」と言われ、渡したくない物を「メツ」と言って背中に隠す。

「ナイ」はこの発話形式が出現(1:4:2に非存在で用いられた)して4日後に拒否の応答に用いられたが、すぐに消失、般用はされなかった。「イイ(イイノ)」は、1:7以降、「要らない、不要」の意で用い始めた。「チガウ」は1:11以降、要求実現が満たされない時の拒否的応答に用いられ、明確な否定を表わすものとして注目されるが、あまり使用例は認められない。嫌悪および不承認の強い拒否感情を表わす際は手持ちの語を駆使している。1:10:14 古鍋と空コップでひとり遊びの時、他児が近寄り取られそうな気配を感じると、「イヤヨ、イタイヨ、ダメヨ」と大声を出し、しっかり握りしめる。

A児の場合、新たに習得した否定語は、強い情動と結

\* 「ミエナイ」のみ1:7から例外的に、希に出現していたが、A児にとって他の言語要素+否定辞「ナイ」の習得は1:9以降である。

\*\* 「〇〇ちゃんアップ」、「それはアップよ」、「〇〇したらアップですよ」のように用いられていた。

びついた、排除拒否に適用する傾向がみられるが、般用するに至らず、「イヤ」「イイ(不要)」を典型発話形式として使用していく。

②要求実現の拒否 「あかない」「できない」「見えない」等を意図するのに「ナイ」が用いられ始めた(1:8~)。「ナイ」の否定詞的単独使用\*\*\*から、2か月後に他の言語要素と結合される否定辞的使用に至る迄の過渡期に、「…ナイ…キナイ」(1:8:30)、「ナイ…ナイ…デキナイ」(1:9:15)という発話が観察され、その移行過程の発話形式とみなされる。要求実現の拒否は、否定辞の付くべき動詞そのものが未習得の故、否定要素のみが言語化されたものであろう。

1:8:30 衣服の着脱などをひとりでやりたがり「(ジ)ブンデ、(ジ)ブンデ」と自己主張。ズボンやパンツのひとつの履き口に両足を一緒に入れ、大奪闘しながら「ナイ…キナイ」と母親に言う。1:9:13 茶筒の外蓋は取り外せるが、中蓋はできなくて「ナイ…ナイ…デキナイ」と母親に言う。1:10以降は「イエナイ、アカナイ、デキナイ」等の単語に移行。

ひと口に拒否といっても、他者からの働きかけに対する応答としての排除拒否と、自発的に開始された要求実現の拒否とは、発話形式の使われ方に明確な違いがみられるのは示唆的である。

③否認 発話形式としては「ナイ」であるが、否認の「ナイ」は単独使用例がほとんど無く、むしろ、他の言語要素と結合される1:9以前は、TABLE 3の例のように、発話による明確な否定をせず(省略又は暗黙の前提として)訂正、主張等の新情報が言語化される。

拒否や禁止は、その表現自体が伝達そのものであるが、否認は、自己の認識判断の反映との性格を備えているので、拒否や禁止に比べ、新情報の伝達に、より比重が置かれる。④禁止 排除拒否に用いられた「メッ」(1:7~)は、1か月後に禁止の発話形式に用いられ始め、排除拒否では使われなくなった。その1か月後、「メッ」に代る禁止の「ダメ」が現われてからは、漸次消失し、発話形式としては「ダメ」のみ用いられる。この期の禁止は、他者への禁止、即ち、他者の行動統制あるいは拘束のみであり、自己禁止、即ち、自らの行動の統制あるいは拘束の発話は出現していない。

1:11:10 戸外で、逃げる蟻を指先でつまもうとすることができず、「アリ、ダメヨ。アリ、ダメヨ。」と言い追

\*\*\* 否定語  
 〔否定詞(自立語として単独使用され、否定を表わす)  
 〔否定辞(付属語として他の言語要素と結合され否定を表わす)〕

いませ。

⑥非存在 発話習得過程に次の段階が認められた。第1は、非存在すべてを「ナイ」で表現する段階(1:4~)。第2は、話題となる対象により「ナイ」と「イナイ」を区別する段階(1:7~)。「ナイ」は、食器・食物・身体各部・日常雑貨(セロテープ・ブラシ他)・衣類(ボタン・服他)・玩具等、無生物に、「イナイ」は、小動物(イヌ・ネコ)・人間(父・姉・友達)・写真の人物、生物にである。第3は、非存在(ナイ, イナイ)と存在(アッタ, イタ)を対立する語として言語化する段階(1:9~)。

A児は1:7以降、限られた範囲内で生物、無生物の違いにより「イナイ」と「ナイ」を使い分けているが、秦野(1977)\*の結果では、この時期の「アルーイル」の使い分けは、認知的理解ではなく、慣用的直観によると考えられる。

また、本来、肯定(無標)は否定(有標)より早く習得されるが、存在(イル, アル), 非存在(イナイ, ナイ)はその限りでない。その理由には、第1に、日本語は非存在を「存在の打消し」、即ち、「肯定形+否定形」で表わさず、異なる概念として扱われるので、子どもは各概念を独立的に学習する、第2に、予想される対象が存在する時よりも、存在しない時の方が知覚的に目立ち、注意が向き、情報度が高いので発話され易い、等が考えられる。

以上の結果、第1に、日本語では何種類かの否定語が、意味機能に応じて異なる発話的形式として対応している、という構造的特徴があり、子どもも、初期から発話形式と意味機能のある程度対応させて使う事が認められた。

第2に、「ナイ」は非存在・否認・拒否の各機能に拡張して用いられる点では、否定の広い意味機能を表わす発話形式と言えるが、英語のように“No”の単独使用で様々の否定を表明するほど般化されて使われない。「ナイ」の発生過程は、初出が1:4:2で非存在に用いられ、その4日後に拒否、さらにその1日後に否認に用いられた。これは、ひとつの発話形式を否定表明として規則化した例として興味深い。

第3に、A児の要求実現拒否の「ナイ」、禁止の「メッ」の使われ方をみると、その意味機能を表現する発話形式を習得していく時、「新しい機能は、始め古い形式で表現される(Slobin, 1973)」一方、「メッ」が禁止に用いられる以前に排除拒否で最初に使用されたことは「新しい形式は、始め古い機能で表現される(Slobin,

\* お茶の水女子大学心理専攻3年生心理実験Ⅱ演習共同研究である。

1973)」と解釈できる。しかし、他の否定発話形式すべてに、この原則が適用されるわけではなかった。

第4に「イヤ、イイ、チガウ、ダメ」等は、日常生活場面で頻発するが、語連鎖が可能な時期になっても、他の言語要素と結合せず、単独使用傾向が強い。これらの単語は、発話そのものが行為であるので、他の言語要素と結合して新情報伝達の必要性が少ないと言えよう。

(5)否定発話における操作方略

A児がいつ頃、どのような方略に基づき否定発話を行っているかを示したのがFIG. 2である。

- 方略1 否定に特定音声(否定的原言語:「アッ」「パッバツ」)を与える。
- 方略2 否定語は一語で独立した単語として用いる(「ナイ」「イヤ」を単独使用し、命題全体を否定する)。
- 方略3 否定語は他の言語要素の配列位置(語順)に影響を与えない。
- 方略4 否定語は他の言語要素の語形(活用)に影響を与えない(他の言語要素と結び付く時、既知の語を単に

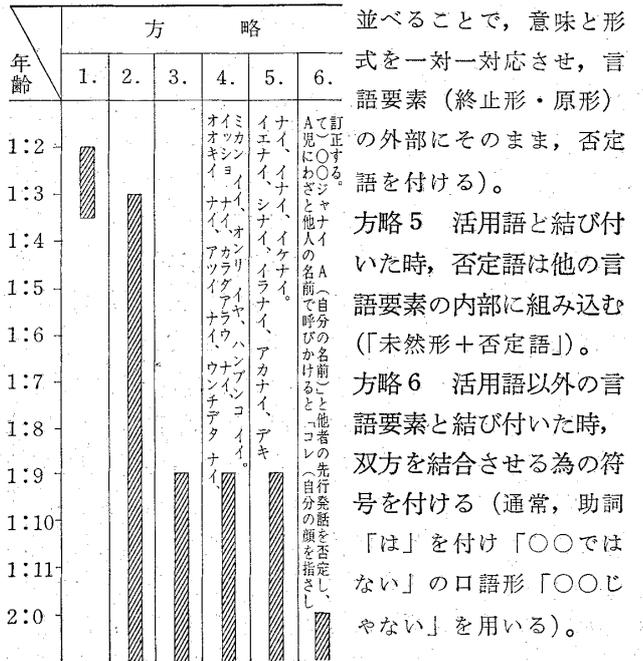


FIG. 2 否定発話における操作方略

子どもの初期否定発話における言語要素の結合は、大人のモデルを模倣的に取り入れた慣用ルールと、大人のモデルとは無関係な、独自の規則体系の両方を構築し、それらを併用しながら、漸次大人の言語構造に近づくように、再構成されるのであろう。

討 論

(1) 首の横振り行動が、否定の慣用的身振りとなる過程

は、他の慣用的身振りの形成と平行して、対人相互交渉の楽しいやりとりの中で習得され、維持されて行くが、対人的伝達能力に遅れの著しい、子ども達の場合この象徴的身振り習得の困難さが考えられる。

西村・水野・若林(1978, 1980)は話しことばを持たない遅滞群の自閉症児(6歳時点)の伝達行動の特徴として、「自発的動作の乏しい段階から、自己の要求に結び付いた imparative (要求表出的) 段階には至るが、自己の要求から離れた declarative (陳述的) 段階に達していない」ことを実証した。さらに綿巻・西村・水野(1983)は、話しことばを持つ遅滞群の自閉症児(9~10歳)の言語特徴として、要求(約50%)、応答・遂行(20~25%)、記述・質問(0%)を示し、記述遂行機能(叙述)の未発達を指摘している。これらの事実から、前発話期に未習得の叙述機能は、発話期においても未形成のまま、記号としての言語習得が進むと言える。単語は増大しても、相手の質問の意図や、意味理解が困難であり、「Yes, No」の応答困難性もそれに起因する。

質問-応答構造は、子どもが操作しなければならない抽象的言語構造である(Steffensen, 1978)が、「質問されたので、応答しなければならない」という考えは、早期に獲得されている。A児の場合、1:1に領きと、首の横振りを使い分けたが、1:8に、ひとり遊びに夢中になっている時、肯定疑問に対してすべて肯定的に回答し、否定疑問に対してすべて否定的に回答する、という、意味的に不一致な応答発話が観察された。同様の事実は Steffensen (1978) の観察でも指摘されている。

このように、正常発達をしている者には、極めて自然に出現する行動を、発達障害児の治療教育で、いかに扱うかは課題のひとつであろう。即ち、①相互作用を開始・維持・終了・回避することが可能な相互作用技能、②他者の行為へ意図的に影響を及ぼそうとする伝達意図、③相互のやりとりを調整する、受け手の感受性、④相互作用を構成する足場となるような行動を形成することにより、確立された相互作用のルーティン化の構築、等を積極的に導入していくことの重要性が指摘される。

(2) 否定に用いられる行動パターンは、他の伝達行動と同様、非発話から発話へと移行するが、特に発話初期の身振りと発話の関係は興味深い。非発話形態で否定を伝え、発話形態で新情報を伝える現象は、会話では新情報が求められ、話者は「情報性」の高い要素を表現する原則(Greenfield & Smith, 1976)に適合する。一般に、ある事態における不確実性(uncertainty)の高い要素、つまり、情報性の高い要素は言語化され、予測可能な要素は言語化されない。この原則は、単に統語発達が進む

ことで消滅はせず、大人でも、首の横振り、その他慣用的身振りは利用されている。

(3) 伝達行動一般をみると、前発話期に身振りや視線、喃語や他の音声を用いた伝達構造で表わされる意味内容は、初期には主体の要求や感情と密接に結び付き、実践的・対人的動機により行われるが、次第に間接化、客観化の方向をとる(Bates, 1979; Carter, 1978; Dore, 1975; Ingram, 1981)。他方、その発達途上、要求や感情表現そのものと離れた形で、外界を客観的に捉え、記号により表現する発達が認められる。

このことは、否定表現の展開でも同様であり、その経過は否定意味機能の習得過程に顕著に表われた。初期の実践的・対人的動機に基づいた排除拒否、欲求不満拒否、要求実現拒否は、やがて、外界との相互関係認識を反映した禁止、否認、非存在の発現となる。

Slobin(1973)の言語習得における複雑性の考えを、拡大借用すれば、否定の意味機能の習得過程は、「認知的あるいは意味的に簡単なものは先に習得する」と言える。(4) 否定の各意味機能に対応する、典型的発話形式の習得過程で、一発話形式が他の意味機能に拡大使用されることは本研究でも、示された。Ito (1981), McNeil & McNeil (1973), Yamaoto(1981)では、「イヤ」が拒否と否認に、「ナイ」が否認、非存在、拒否に使用された事例が報告されている。これは、否定の意味を表わすのに、同じ規則をあらゆる場合に適用する方略をとる、という規則化の原則(The Principle of Regularization; Slobin, 1973)から説明できるかもしれない。

さて、子どもが、どの発話機能を表わす発話形式を早く使用したかについて、本研究と野地(1973, 1977)、大久保(1969)、秦野(1981)\*、Ito(1981)等の結果を比較検討すると、共通点は、排除拒否が早く、要求実現拒否、禁止はやや遅いこと、相違点は、非存在、否認の出現の様相に個人差が認められることである。

発話形式の発生に関しては、認知的複雑性(意味的に単純なもの程、早く習得する)に加え、形式的複雑性(表現形式の単純なもの程、早く習得する)、および語用論的側面(場面における情報度の高いもの程、発話され易い)が関与するので、子どもが意味機能を習得する順序を、意味機能を表わす発話形式の使用順序から推論はできないし、又あまり意味も無い。否定習得の順序性を発話形式のみに限って論ずる研究(Bloom, 1970; McNeil & McNeil, 1973)は、子どもの伝達能力査定の際から不備が残る。

\* H児(長女)の出生時から1:8までの否定表現を分析資料とした。

本研究では、排除拒否は、他の機能よりも発話形式の種類が多いが、①排除拒否は使用頻度が圧倒的に高く、その出現の様相も様々で、多くの発話形式が生ずる可能性がある、②新たに習得した否定語を、まず排除拒否に使う傾向があり、一時的に発話形式が多くなる、等の理由が考えられるが、更に他事例との比較が必要であろう。

要求実現拒否が、非発話では早期に、発話では遅く出現する理由は、子どもにとって直接要求語を使用する方が、伝達効率が高いので、否定語は用いない、という語用論的側面から説明できるかもしれない。

さて、McNeil & McNeil (1973) は、「チガウ」が総括的否定であることを指摘した。本事例では、「チガウ」は要求実現が満たされない時の応答的拒否として出現した。この発話形式は2:0迄の出現頻度は低く、2歳前半から中頃、拒否、禁止、否認を表現するのに用いられ、その際新情報が加わることが多かった。「チガウ」は、話題となる事柄が、自己の基準なり認識なりと合致せず、現実とのズレに不都合があるとの判断に基づき、総括的否定としての機能を果たすことが確認された。

McNeil & McNeil (1973)、秦野 (1981)、Ito (1981)、Yamamoto (1981)、山田 (1982) 等の結果からも、「チガウ」が、否定発話形式習得の中で、比較的遅く出現し、「チガウ」が意味的により複雑であることが指摘される。

以上の否定発話形式に関しては、個人差、地域差(方言)の面からも、今後検討されるべき課題である。

(5) 否定発話の操作方略を、英語児(Bellugi & Klima, 1968; Bellugi, 1971)と比較すると、次のような共通点が認められた。第1に、否定語単独使用、第2に、否定要素を他の言語要素に単純付加する、第3に、否定要素を他の言語要素内に組み入れる、第4に、慣用的ルールと自己認知ルールを併用する、である。従って、否定発話操作方略は、本研究および綿巻(1977)の結果と一致し、基本的には子どもの普遍的方略と考えられる。唯一の相違点は、否定要素を他の言語要素に単純付加する際、日本語の場合は必ず後置されるが、英語はその限りでは無い。これは、発話を継ぎ足しつつ、新しい文を構築する、日本語の言語構造に準拠するものであろう。

ところで、A児の場合出現しなかったが、子どもの発話が、最終的には大人の言語構造に限りなく近付くという方向性からみると、理論的には、不適切な否定語単純付加方略(方略4)から、適切な変化結合方略(方略5・6)へ移行する過程で、不適切な変化結合方略という中間段階が仮定される。即ち、他の言語要素と否定語が結合する場合、「言語要素を変化させることは知っているが、その形態は大人のモデルに一致しない」という過

渡段階である(クレイナイ→クレイクナイ→クレイデハナイ・クレイジャナイ)。

この結果から導き出された、否定表現の理論展開の妥当性については、他事例資料の集積と比較で、今後実証されようし、A児の言語発達の別の側面での、身振りと言語の関係と、否定行為でのその比較により、否定表現の発達特徴を明確にする事も、今後の課題である。

## 引用文献

- Akiyama, M. M. 1979 Yes-no answering systems in young children. *Cognitive Psychology*, 11, 485-504.
- オースティン, J. L. 1978 坂本百大(訳) 言語と行為 (Austin, J. L. 1962 *How to do things with words*. Oxford university press.)
- Bates, E. 1979 *The emergence of symbols: Cognition and communication in infancy*. Academic Press.
- Bellugi, U. & Klima, U. 1968 Linguistic mechanisms underlying child speech. In Zale, E. M. (Ed.), *Proceedings of the conference on language and language behavior*. New York, Appleton-Century-Crofts.
- Bellugi, U. 1971 Simplification in children's language. In Huxley, R. & Ingram, R. (Eds.), *Language acquisition: Models and methods*. London, New York.
- Bloom, L. 1970 *Language development: Form and function in emerging grammar*. M. I. T. Press, Cambridge, Mass.
- Brown, R. 1973 *A first language: The early stages*. Cambridge, Mass. Harvard university press.
- Carter, A. L. 1978 From sensorimotor vocalizations to words: A case study of the evolution of attention-directing communication in the second year. In Lock, A. (Ed.), *Action, gesture and symbol: The emergence of language*. Academic press.
- Clark, E. V. 1983 Convention and contrast in acquiring the lexicon. In Seiler, T. B. & Wannenmacher, W. (Eds.), *Concept development and the development of word meaning*, 67-89.
- Dore, J. 1975 *The development of speech acts*. Mouton
- Greenfield, P. M. & Smith, J. H. 1976 *The structure of communication in early language development*. Academic Press Inc., New York.

- Halliday, M. A. K. 1975 *Learning how to mean: Exploration in the development of language*. Arnold.
- 秦野悦子 1977 「あります」「います」の使い分けと生物概念の発達 日本教育心理学会第19回総会発表論文集 132-133.
- 秦野悦子 1981 否定表現の発達 日本心理学会第45回大会発表論文集 512.
- 池上嘉彦 1978 意味の世界——現代言語学から見る NHK ブックス 日本放送協会
- Ingram, D. 1981 The transition from early symbols to syntax. In Schiefelbusch, R. L. & Briker, D. D. (Eds.), *Early language: Acquisition and intervention*. University Park Press.
- Ito, K. 1981 Two aspects of negation in child language. In Dale, P. S. & Ingram, D. (Eds.), *Child language: An international perspective*. Univ. Park Press, 105-114.
- Jakobson, R. 1972 Motor sings for "yes" and "no". *Language in Society*, 1, 91-96.
- Keller-Cohen, D. Chalmer, K. & Remler, J. E. 1979 The development of discourse negation in the nonnative child. In *Developmental Pragmatics*. Academic Press 305-322.
- Klima, E. & Bellugi, U. 1966 Syntactic regularities in the speech of children. In Lyons, J. & Wales, R. (Eds.), *Psycholinguistic papers*, Edinburgh, Edinburgh Univ. Press.
- Leopold, W. F. 1949 *Speech development of bilingual child IV*. Northwestern university press.
- McNeill, D. & McNeill, N. 1973 What does a child mean when he says "No"? In Ferguson, C. A. & Slobin, D. I. (Eds.), *Studies of child language development*. Holt, Rinehart & Winston Inc., New York, 619-627.
- 西村辨作・水野真由美・若林慎一郎 1978 自閉症児の言語獲得についての縦断研究 児童精神医学とその近接領域, 19, 269-289.
- 西村辨作・水野真由美・若林慎一郎 1980 前言語的段階にある自閉症児の伝達行動 児童精神医学とその近接領域, 21, 267-275.
- 野地潤家 1973 幼児期の言語生活の実態Ⅱ 文化評論出版
- 野地潤家 1977 幼児期の言語生活の実態Ⅰ 文化評論出版
- オクサール, E. 1980 在間進(訳) 言語の習得 大修館書店  
(Oksaar, E. 1977 *Spracherwerb im vorschulalter Einführung in die Pädolinguistik* W. Kohlhammer GmbH.)
- 大久保愛 1969 幼児言語の発達 東京堂出版
- 太田朗 1980 否定の意味——意味論序説 大修館書店
- Pea, R. D. 1980 The development of negation in early child language In Olson, D. R. (Ed.), *The social foundations of language & thought* Norton, 156-186.
- Pea, R. D. 1982 Origins of verbal logic: Spontaneous denial by two-and-three-year olds. *Journal of child language*, 9, 627-643.
- Searle, J. R. 1969 *Speech acts: An essay in the philosophy of language*. Cambridge. University Press.
- Slobin, D. I. 1973 Cognitive prerequisites for the development of grammar. In Ferguson, C. A. & Slobin, D. I. (Eds.), *Studies of Child language*, Holt, Rinehart & Winston, New York.
- スピッツ 1968 古賀行義訳 ノーとイエス 同文書院  
(Spitz, R. A. 1957 No and yes—On the genesis of human communication)
- Steffensen, M. S. 1978 Satisfying inquisitive adults: Some simple methods of answering yes / no questions. *Journal of Child Language*, 5, 222-236.
- 綿巻徹 1977 否定の獲得 日本教育心理学会第19回総会発表論文集 128-129.
- 綿巻徹・西村辨作・水野真由美 1983 話しことばを持つ遅滞群の一自閉児の言語 特殊教育学会発表論文集
- ウェルナー, H. カプラン, B. 1974 柿崎祐一(監訳) シンボルの形成: 言葉と表現への有機発達論的アプローチ ミネルヴァ書房  
(Werner, H. & Kaplan, B. 1963 *Symbol formation: An organismic-developmental approach to language and the expression of thought*. John Willy & Sons Inc.)
- Wode, H. 1977 Four early stages in the development of L<sub>1</sub> negation. *Journal of child language*, 4, 87-102.
- 山田洋子 1982 0～2歳における要求一拒否と自己の発達 教育心理学研究, 30, 128-138.

Yamamoto, M. 1981 The semantic development of negation in English and Japanese in simultaneously bilingual child. Unpublished master's thesis. University of Hawaii (personal communication)

Volterra, V. & Antinucci, F. 1979 Negation in child language: A pragmatic study in Keenan, E. O. (Ed.) *Developmental Pragmatics* Academic

Press, 281-304.

付記1. 本研究の一部は日本教育心理学会第26回総会、日本心理学会第48回大会において発表した。

付記2. 本研究をまとめるにあたり、京都国際社会福祉センターの麻生武、信州大学の岩立志津夫、愛知県心身障害者コロニーの綿巻徹、愛知淑徳短期大学の山田洋子、の各氏より貴重な助言をいただきました。記して感謝致します。

(1984年3月2日受稿)

## ABSTRACT

### DEVELOPMENT OF NEGATIVE EXPRESSION IN THE FIRST TWO YEARS OF INFANTS

by

Etsuko Hatano

The purpose of this study was to examine the developmental process of pragmatic negation from the sensorimotor interaction to the early linguistic communication.

The data for this case study were the longitudinal diary records of my daughter A, from her birth to 24 months of age. The data for analysis were 396 nonverbal and verbal episodes of pragmatic negation.

Resultant findings :

(1) The development of media used for pragmatic negation

The earliest emergence of media she used was crying with nondirective activities. The second was exclusive direct actions for an object or person, the third was the symbolic use of ritual headshaking gesture, and the last was the verbal negation. The above-mentioned negative media were not only the change from gesture to language, but the later media were combined to the earlier media, then building more effective communications.

(2) The acquisition of head gestures

Nodding and shaking the head are a type of symbolic behaviour similar to affirmative/negative particles, and the establishment of these gestures was at 1:1.

(3) The process of the functional differentiation of

pragmatic negation

It could clearly be seen that function preceded form in the development of negation. In this study five-functional categories of negation were suggested: 1. exclusive rejection, 2. rejective expression of request for supportive action, 3. denial, 4 non-existence, 5. prohibition.

Rejection was the first function in which negations were used for, the first topics of negation were concretely present in the child's immediate world of activity and transcended the here and now only when negative comments came up. About a year later, other types of negation such as denial, non-existence, prohibition appeared. In the later negation contexts, the topic of negation had transcended on the spot.

The negation acquired later was based on one's judgment about unfulfilled expectation or presupposition. The more mature use of unfulfilled expectation provided an important insight into the development of pragmatic negation. So, the developmental sequence of negation from emotional to declarative was confirmed.

(4) Form-Function Mapping

Some lexical items, *iya* (*iyayo*, *iyada*), *attspu*, *metts* (a baby-talk), *nai*, *ii*, *chigau*, were used to signal

exclusive rejection. Lexical item *nai* (*inai*) signified nonexistence, *nai* expressed denial, and *dame* (*metts*) indicated prohibition. In early stage, *nai* was overregularized to almost all functions to negation.

(5) The developmental strategies of negative lexicon

Strategy 1. To intend negation, the specialized vocal must be used.

Strategy 2. The negative operator is used independently and negates the whole proposition.

Strategy 3. The negative operator has fixed location, and in Japanese, it is put at the last

part of the utterances.

Strategy 4. To combine the words, the negative operator is only added to other linguistic items.

Strategy 5. To combine the words, other linguistic items are inflected, and then added to the negative operator.

Strategy 6. To combine the words, other linguistic items (nouns and nominal adjectives) are followed by the negative form *janai*.